北九州芸術劇場×響ホール 共同主催事業

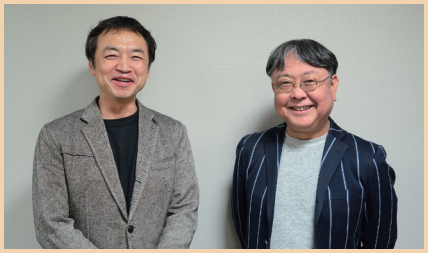
ラヴェル最期の日々

Interview
加藤昌則［音楽監督・作編曲・ピアノ］×岩崎正裕［演出・脚本］にきく

作編曲家の加藤昌則はあるとき、フランス近代の大作曲家モーリス・ラヴェルが、その晩年、頭の中に音楽を溢れさせながら記譜する術を失っていったことを知り、強い衝撃を受けた。その衝撃をもとに演出家の岩崎正裕と組んで制作した、音楽とダンスと演劇のコラボレーション「ラヴェル最期の日々」は2024年に東京で初演されて大好評を博し、このほど再演、北九州に初登場する。

取材&構成：萩谷由喜子（音楽評論家）
舞台写真撮影：飯田耕治

加藤　ラヴェルは57歳の頃、タクシー事故に遭って、それを境に次第に音符を書くことができなくなっていきました。つまり、頭の中に鳴っている音と音符との関係がわからなくなり、音符や記号の約束事を記憶から引き出せなくなっていったんですね。僕は同じ作曲家として、楽想は浮かぶのに音符を書けなくなるということが非常にショックでした。そしてこれは演劇として構成して、ラヴェルの晩年の日々に思いを寄せられるのではないかと思い、脚本と演出をお願いできる方を探して、ある方から、これまでに音楽劇を多数手がけていらした岩崎さんを紹介していただいたんです。



岩崎　加藤さんと初めてお会いしたのは大阪のカフェでしたね。加藤さんは大阪までいらしてくださったんです。僕は関西を拠点に、これまで主に大衆演劇の分野で活動してきたので、クラシック音楽にはまるで詳しくなく、ラヴェルの名前は知っていましたが、曲は『ボレロ』と『亡き王女のためのパヴァーヌ』くらいしか知らない程度の知識レベルでした。

加藤　それがよかったんですよ（力をこめて）。クラシック音楽というと、特別な教育を受けた人や一部の詳しい人たちのものという印象がありますが、僕が作りたかったのは、クラシックに特別に親しんでいないごく普通のお客様にも足を運んでいただける、万人向きの音楽劇だったので、岩崎さんのクラシック・レベルは、そのお客様層のモデルにぴったりだったんです（笑）。

岩崎　それで、加藤さんの話をうかがって僕もラヴェルの晩年に興味を持ち、加藤さんが持ってきてくださったラヴェルの生涯を描いた本を読みました。評伝ではなく、ジャック・ド・ゾゲブという友人の目を通して描かれた小説なんですけれども、そこには、自分が若い頃に作曲した『亡き王女のためのパヴァーヌ』を聴いて、“なんて、いい曲なんだ。誰が書いたんだ？”と叫んだという話も出てきました。

加藤　僕はそれまで、『亡き王女のためのパヴァーヌ』はそれほど好きではありませんでしたが、その話を読んで、若い頃に作曲したこの曲が、晩年のラヴェルの頭の中で、自分ではない誰かが作曲した“いい曲”として鳴っている、ということに何ともいえない切ない気持ちになり、劇の最初と最後、それからところどころに、それとわからない程度の断片をしのばせることで全体の額縁にしようと決めました。

岩崎　最初に構想を立てたとき、まず、俳優が

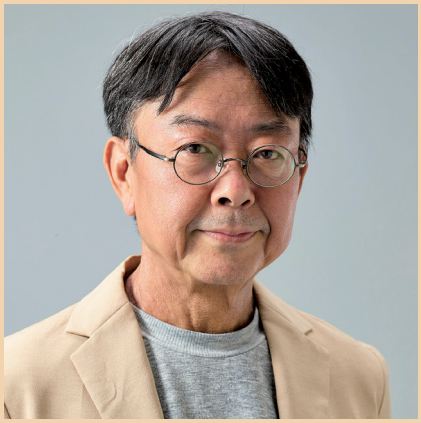


ラヴェルを演じるのは不可能だと感じました。そこで、非常に優れたダンサーの小尻健太さんにダンスで表現していただくことにしました。小尻さんにはラヴェルに扮していただきますが、台詞はなく身体表現だけです。でも、ラヴェルはたいへんお洒落だった人ですから、小尻さんのスーツとかネクタイとかにはそれを反映させました。そして、ストーリーの進行役として、俳優の西尾友樹さんにお願いしました。友人ゾゲブに扮した西尾さんが、一人でしゃべって演技をして物語を牽引します。そして加藤さんの編したラヴェルの音楽が様々な形で現れて、音楽も役者のように劇に参加します。ですから、これはダンスと演劇と音楽の三者による舞台作品なんです。



せっかく足を運んだのに、もしもつまらなかったら、もう二度と行かないでしょう。そうならない工夫をあちこちにたくさんしました。

加藤昌則［音楽監督・作編曲・ピアノ］



**音楽も役者のように劇に参加します。
これはダンスと演劇と音楽の三者による
舞台作品なんです。**

岩崎正裕［演出・脚本］

加藤　僕は小学生の頃、ピアノを習っていましたが、教則本はつまらなくて、自分で勝手に弾くのが好きでした。あるとき、シューマンのピアノ協奏曲を知って楽譜を買ってもらい、これを教えてください、と教室へ持って行きました。そうしたら、若い女の先生は困ってしまって、別の先生を紹介してくださいました。その先生のところへ通ううち、世の中には作曲ということがあるらしい、五線の上に音符を書いていくと曲ができるらしいが、どう書いたら曲になるんだろう、と思い、作曲を教えて欲しいとお願いしました。するとその先生が、それなら専門の先生に就いたらよい、と言って紹介してくださったのが、尾高惇忠先生だったんです。小学校5年のときです。惇忠先生は、まずは一緒にピアノを弾こうとおっしゃり、ラヴェルの『マ・メール・ロワ』の『美女と野獣の対話』を連弾しながら、音楽で対話するということ、表情が大切であることなどを丁寧に教えてくださいました。その教えから、音楽にもキャラクターがあることが理解できました。この作品もそのつもりで編曲しました。楽器編成は、ヴァイオリンとチェロとピアノ、それにバンドネオン。バンドネオンのあの郷愁をかきたてる音色、物淋しい感じがラヴェルの晩年に相応しいと思いました。今回はベテランの北村聡さんにお願いしました。ヴァイオリンの橘和美優さんは第19回東京音楽コンクールに第2位になられた若手で、チェロの清水詩織さんは東京都交響楽団の奏者、それに僕のピアノです。橘和さんの『ツィガーヌ』は初演のとき、客席がしんとするほど聴き手を引き付けました。高い技術を持つ演奏家が渾身で繰り広げるパフォーマンスは、若い人からシニアまで、どんなお客様の胸も打たずにはいられません。『ボレロ』の基本リズムを刻むのは、オーケストラ版のオリジナルでは小太鼓ですが、僕の編曲版では思いがけない楽器が担当しますので、それもぜひお楽しみに……。

岩崎　音楽と語りとのバランスですが、僕は最初、音楽が演奏されているとき、語りは控えたほうがいいかと思っていたんですが、加藤さんは、いや、全く構わない、かぶせてくれてよい、とおっしゃるので、そういう場面も多くなりました。

加藤　音楽と語りが重なったとき、そこに生まれる何かがあると思うんです。もちろん、語りが入ってきたときは音量を調節しますが。

岩崎　音楽と語りを普通にかぶせると闘ってしまうんです。でも、闘うのではなく、音楽と協調し合ったとき、そこに新たな次元が生まれます。そのコラボレーションを是非、体験していただきたいものです。生の舞台の鑑賞体験はかけがえのない生涯財産となります。

加藤　コロナ禍以来、何か情報を得るにはスマホをみることが当たり前となってしまいましたが、スマホで知識は得られても、実際に体験してみなければわからないことがたくさんあります。現場に来て体験して初めて、舞台作品のよさと味わいがわかります。せっかく劇場へ足を運んだのに、もしもつまらなかったら、もう二度と行かないでしょう。だから僕は、そうならない工夫をあちこちにたくさんしました。それをぜひ、受け取りにきて欲しいんです。演劇ファン、クラシック音楽ファン、ダンスファンの観客層が混ざってこの作品を好きになっていただきたい。最後も単なる悲劇では終わらないよう、後味にも配慮しています。





Information

北九州芸術劇場×響ホール 共同主催事業

「ラヴェル最期の日々」

2027年
1月9日（土）14:00
北九州市立 響ホール

［音楽監督・作編曲］加藤昌則
［演出・脚本］岩崎正裕
［出演］
振付・ダンス／小尻健太
俳優／西尾友樹
ピアノ／加藤昌則
ヴァイオリン／橘和美優
チェロ／清水詩織
バンドネオン／北村聡

公演情報詳細はこちら



チケット一般発売
11/15（日）